日蓮大聖人御書全集

富木殿御返事（ときどのごへんじ）

（悲母の帷の事（ひもかたびらのこと））

新版1305～1306

富木殿御返事（悲母の帷の事）

文永12年（’75）2月7日　54歳　富木常忍

富木殿御返事　日蓮

帷一領、給び候い了わんぬ。

夫れ、仏弟子の中、比丘一人はんべり。飢饉の世に、仏の御時事かけて候いければ、比丘、袈裟をうってそのあたいを仏に奉る。仏、その由来を問い給いければ、しかじかと、ありのままに申しけり。仏云わく「袈裟は

これ三世の諸仏の解脱の法衣なり。このあたいをば我ほうじがたし」と辞退しましましかば、この比丘申さく「さて、この袈裟あたいをばいかんがせん」と申しければ、仏云わく「汝、悲母有りや不や」。答えて云わく「有り」。仏云わく「この袈裟をば、汝、母に供養すべし」。この比丘、仏に云わく「仏は、この三界の中、第一の特尊なり。一切衆生の眼目にておわす。たとい十方世界を覆う衣なりとも、大地にしく袈裟なりとも、能く報じ給うべし。我が母は無智なること、牛のごとし、羊よりもはかなし。いかでか

価　報

袈裟の信施をほうぜん」と云々。仏、返して告げて云わく「汝が身をば誰か生みしぞや。汝が母、これを生む。この袈裟の恩、報じぬべし」等云々。

これはまた、齢九旬にいたれる悲母の、愛子にこれをまいらせさせ給う。しかも我と老眼をしぼり、身命を尽くせり。「我、子の身としてこの帷の恩かたし」とおぼしてつかわせるか。日蓮、また、ほうじがたし。しかれども、また、返すべきにあらず。この帷をきて、日天の御前にしてこの子細を申し上ぐれば、定めて釈梵諸天しろしめす

べし。帷(かたびら)は一(ひと)つなれども、十方(じっぽう)の諸天(しょてん)これをしり給(たも)うべし。露(つゆ)を大海(たいかい)によせ、土(つち)を大地(だいち)に加(くわ)うるがごとし。生々(しょうじょう)に失(う)せじ。世々(せぜ)にくちざらんかし。恐々謹言(きょうきょうきんげん)。

二月七日(にがつなのか)　日蓮(にちれん)　花押(かおう)